

第1章 構想策定の目的と位置づけ

1 構想策定の背景と目的

近年、過疎化や少子高齢化に伴う人口減少等、文化財を育み、支えてきた地域の社会動向の変化により、文化財の継承が困難になってきている。こうした状況において、今後、文化財を適切に継承していくためには、地域が自らの文化財を再認識するとともに、行政だけでなく、地域社会に関わるあらゆる主体が参画し、地域の文化財の保護を担っていくことが求められている。

また、文化財は人々の営みと関わりながら価値を形成してきたものであり、文化財同士も相互に関連性を持っている。そのため、個々の文化財単体としての価値を把握し指定等により保護していくことに加え、指定の有無や種類の違いにかかわらず、地域独自の視点からの評価も含め、文化財の価値を総合的に把握し、関連するものを一体的に保全活用していくことが求められている。

寿都町においても、過疎化や人口減少等の影響により、地域固有の歴史や文化の継承が危ぶまれる状況である。これらの課題に対し、産業振興による雇用の創出や交流人口の増加、移住定住の促進等の策を講じ“安心して暮らしていけるふるさと”を目指している。

また、寿都町に存在する歴史や文化を地域の魅力と捉え、保存活用及び各種施策への反映を行うことにより“歴史を活かしたまちづくり”を実現する。

これらの背景を受け、以下の3点を目的に本構想を策定する。

- 寿都町に存在する歴史文化資産を、文化財の指定・未指定にかかわらず幅広く捉えて的確に把握し、歴史文化資産をその周辺環境まで含めて、総合的に保存活用するためのマスタープランとする。
- 「第7次寿都町総合振興計画」では5つの基本目標を掲げており、そのなかで「地域資源を活かし、賑わいを創出するまち」「すべての人が輝く協働のまち」を明示している。地域資源を“まちの宝”としてとらえ、積極的に活用することで町の活性化を図ることや、町民はもとより企業や団体、行政が連携し、協働によるまちづくりを推進していくことである。
また「寿都町まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、具体的な施策のなかで「文化財を活かした地域活性化」「連携事業の推進」「体験交流の推進」を掲げ、産業や観光の振興、地域力の向上を目指している。これらの方針を踏襲するとともに、本構想の策定により、寿都町の新たな価値を探り、さまざまな施策へ反映させる指針とする。
- 地域住民自らが、地域にある自然や背景、歴史的建造物などの貴重な財産を再発見・再認識し、産業、観光、教育等へ活用するなど、歴史文化資産を活かしたまちづくりを目指す。

2 構想の位置づけ

寿都町の最上位計画である「第7次寿都町総合振興計画」（以下「振興計画」）【計画期間：2010（平成22）年度～2019（平成31）年度】は、すべての分野における行財政運営の基本となる計画である。振興計画に掲げるまちの将来像「地域の宝を、地域の輝きにつなげる安らぎのまち」を実現するため、5つの基本目標を柱にまちづくりを推進している。

2014（平成26）年に「まち・ひと・しごと創生法」が制定され、急速な少子高齢化、人口減少、東京圏への過度な人口集中に歯止めをかけ、日本全体の活力を上げるための方策が採られることとなった。

それに伴い、寿都町では2016（平成28）年2月に、今後目指すべき将来の方向性と人口の将来展望を示す「寿都町人口ビジョン」（以下「人口ビジョン」）と「寿都町まち・ひと・しごと創生総合戦略」（以下「総合戦略」）【計画期間：2015（平成27）年度～2019（平成31）年度】を策定した。人口ビジョン及び総合戦略は、振興計画のうち人口減少の克服と地方創生に特化した戦略をまとめたものである。

「寿都町歴史文化基本構想」（以下「基本構想」）を策定するにあたっては、これらの行政計画との整合性を図るとともに、振興計画の基本目標や施策及び総合戦略を念頭に置き、議論を進めてきた。基本構想は、寿都町に存在する歴史文化資産を地域の特色や魅力と捉え、保存活用することで地域の歴史文化を継承していく仕組みであり、まちの将来像の実現を目指し、さまざまな施策へ反映させるための指針とする。

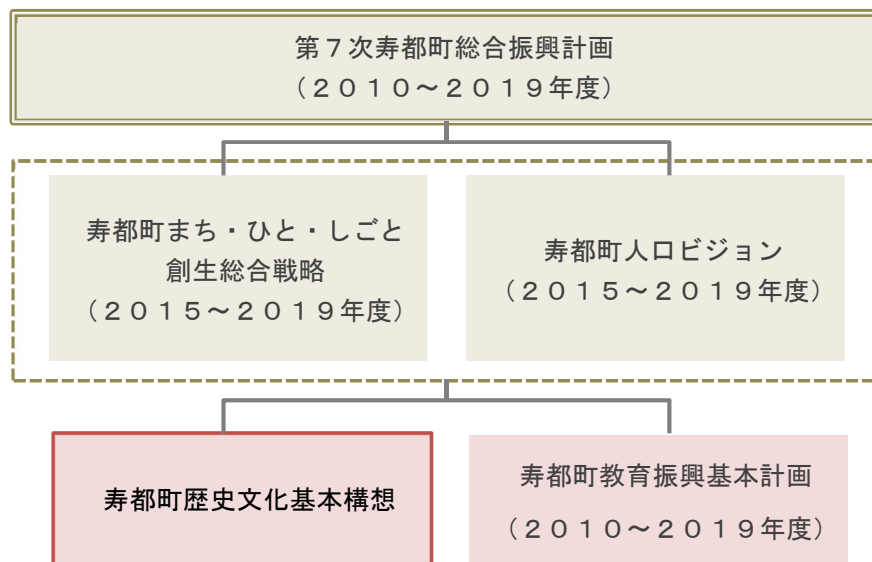


図 歴史文化基本構想の位置づけ

振興計画において、5つの目標の中で本構想との関連が深いのは「地域資源を活かし、賑わいを創出するまち」「地域を知り、人を豊かに育むまち」の2つである。

また、総合戦略においては、8つの施策のうち、②文化財を活かした地域活性化（観光ブランドの強化）、③連携事業の推進、⑥体験交流の推進の3つは特に本構想と関連が深いと言える。

「寿都町教育振興基本計画（後期版）」

○策定時期：平成22年2月策定（10年計画）

○期間：前期 平成22年2月～平成27年2月

後期 平成27年3月～平成32年3月

○5つの基本目標（基本目標の下に「目標の方向性」10項目・「具体施策」23項目）

①生きる力（知徳体）の育成

②地域に開かれ信頼される学校づくりの推進

③地域で子どもたちを育む環境づくりの推進

④互いに意欲的に学びあう生涯学習の推進

⑤教育環境の充実

○歴史文化基本構想との関連項目：基本目標「⑤教育環境の充実」→目標の方向性「文化の伝承・振興」→具体施策「文化財の保護・活用」

（該当箇所：

「道有形指定文化財である「漁場建築佐藤家」は、平成28年度までの5ヵ年の修理を計画しています。現在、史跡指定に向けた調査活動を実施しているところです。史跡指定となれば、文化財としての価値が高まりますが、同時に、専門的な知識を持つ人材が必要となります。史跡について、町民全体が知識や関心を持つような取組を進めていくことが、史跡を生かすために重要です。特に、古文書などの資料を扱える人材の育成は、寿都の歴史を調査・活用するうえで重要な課題といえます。こうした知識や意識への働きかけとして、専門機関と連携し、講座や文化財の見学会を行うなど、住民の学習活動を推進していきます。

文化財の活用については、さまざまな分野が考えられますが、特に歴史教育への活用は重要です。専門的な知識を持つ指導者によって、漁場建築佐藤家での歴史的な体験活動プログラムを開発し、学校や社会教育事業で活用できるように環境整備を進めていきます。）」

3 構想策定の体制

基本構想を策定するにあたり、地域の貴重な歴史文化資産を再発見・再認識し、守り、継承していく仕組みを構築するため、学識経験者・町民・行政が一体となった取組が実行できるよう、「寿都町歴史文化基本構想策定委員会設置要綱」を定めた。【参考資料1】

この要綱は、寿都町の歴史や文化の総合的な保存活用のための寿都町歴史文化基本構想を策定することを目的としており、「寿都町歴史文化基本構想策定委員会」（以下「策定委員会」）を設置することを明記している。この要綱に基づき委員会を設置し、寿都町歴史文化基本構想策定委員（以下「策定委員」）及び寿都町歴史文化基本構想策定調査委員（以下「策定調査委員」）を委嘱した。【参考資料2】

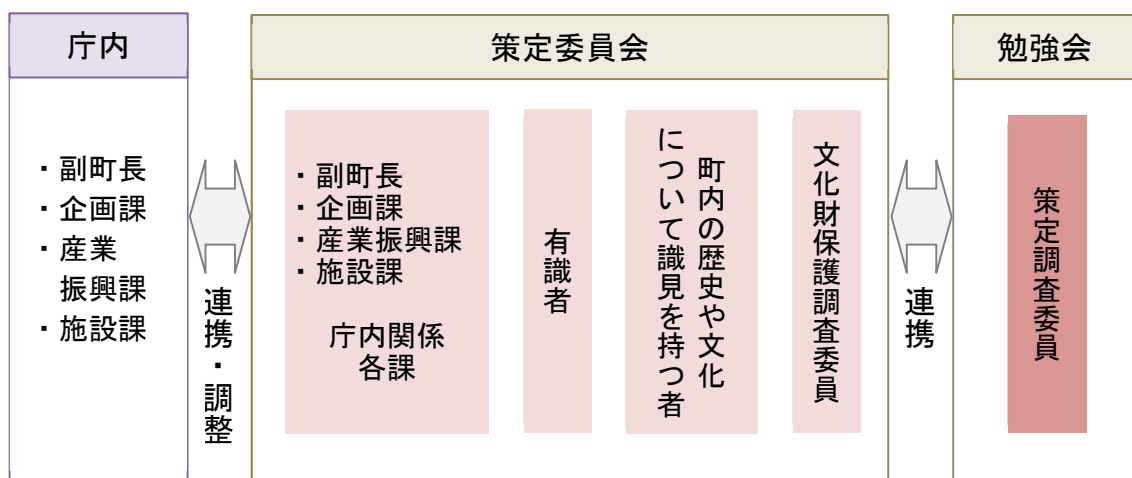


図 構想策定の体制図

4 構想策定の経緯

基本構想の策定に当たっては、前述のとおり委員会を設置し検討を進めた。

文化庁が定めた「歴史文化基本構想策定技術指針」を基に作業を進め、2016（平成28）年8月10日に第1回目の策定委員会を開催し、以後、6回の策定委員会と9回の策定調査委員勉強会を開催した。【参考資料3】

第2章 寿都町の概要

1 寿都町の自然的環境

<位置・地勢>

寿都町は、北海道の南西部、日本海に面する、函館・小樽の間に位置している。東は蘭越町、西は島牧村、南は黒松内町と境界を接し、東西14.0km、南北23.5km、総面積は95.37km²となっている。

寿都湾を囲むように弓状に形成された土地の殆どが森林、原野で、海岸線に沿って居住・施設・産業空間が形成、東は天狗山、幌別岳、西は母衣月山が境界線上に連なる。ゴツゴツとした岩場の岩礁地帯、弓状の入り組んだ複雑な海岸線は長く約28.9km、朱太川河口の浜中地区は長さ4kmの砂浜地帯となっている。

地理的条件から平坦地が少なく、日本海に注ぐ朱太川河口域の湯別地区に扇央地がみられる程度となっている。

主な岩質は、泥岩や火成岩、火砕岩、流紋岩の他、段丘堆積物や海岸平野堆積物などの堆積岩であり、新生代、新第三紀の中新世に形成されたと見られる。また寿都町史Ⅰによると、火山活動も激しく、寿都湾自体、供積世末葉時代の火山活動による陥没の、カルデラ形式でないかともいわれている。



寿都湾と海岸線



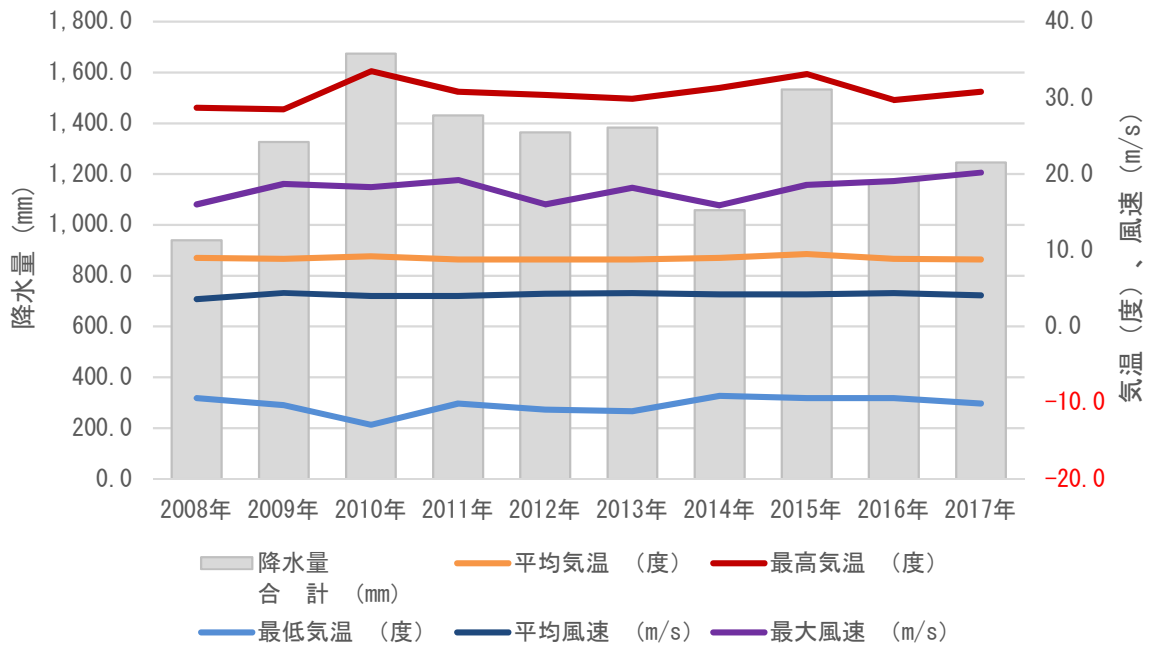
図 寿都町の位置図

＜気候・動植物＞

寿都町は、対馬海流（暖流）の影響を受け、緯度の割に温和な気候である。黒松内低地帯を太平洋側から寿都湾へ吹き込む「だし風」*1が特徴となっている。

森林が町面積の78%を占め、殆どが天然林で、ブナ林の北限となっている。チシマザサ（ブナ軍団）やエゾイタヤ（シナノキ群落）が土地の大半を占め、その他ササ草原やトドマツ植林、落葉針葉樹植林など、種類の豊富な植生が広がっている。

海には、海の森*2である藻場（近年、海の砂漠化が進んでいる）が分布している。



グラフ 寿都町の気候（降水量及び気温、風速及び風速）

※1 だし風

春から秋に吹く局地的な強風のこと。山側から沖へ吹くので“船を出す風”という意味である。黒松内低地帯が太平洋側の噴火湾から寿都湾に向け徐々に狭まっているため、太平洋側からの南風が強められ、寿都湾に吹き込む。

かつてはニシンが獲れる時期に吹き荒れたので、何日も時化（しけ）で漁に出ることができなかつたり、ニシンを沖に追いやってしまったりと人々から嫌われていた。また、太平洋側からの風は海霧（うみぎり）も運び、町の人々が「ジリ」と呼ぶ霧雨も多く発生させる。秋から冬になると風の方向は変わり、日本海側からの強風、通称「たま風」となる。風を正面から受ける弁慶岬の周辺や歌棄、磯谷方面の民家は、冬囲いで厳しい風雪から家を守っている。



※2 海の森の磯焼け（海の砂漠化）現象と対策

かつては海藻が生い茂っていた「海の森」が、温暖化による海水温の上昇や海況変動、水産生物のバランス等の要因により、長い年月のなかで少しずつ減少し、栄養のない、海藻や魚類などの水産生物にとって魅力のない海へと変化している。

寿都町では、平成22年度から水産加工残渣と木質チップを原料とした堆肥生産試験を開始し、翌年には堆肥製造施設を整備して本格稼働した。堆肥を原材料から製造し、施肥がしやすい形状へ手作業で加工した上で、海への施肥を行ってきた。

施肥材の加工を機械化することで増産体制を確立するとともに、継続して施肥を行ってきた海域では、一定の成果（コンブ群落の再生・ウニの身入り向上）が得られた。

海藻群落は、貝や魚類の大切な棲みかになっているだけでなく、餌環境や産卵場としても重要であり、水産資源の維持や生産力を促すための大きな原動力でもある。

「海の森」を再生させることは、地域の産業を育てる上で大きな役割を持つと同時に、豊かな水産資源を将来へ残すための重要な取組である。

2 寿都町の歴史

<縄文期・擦文時代>

全町にわたり、43カ所の遺跡が発掘されている。古くは約1万2000年前の湯別地区の石器や朱太川河口付近で多くの遺跡が発見されている。

約4,000年前の縄文期を中心に、擦文期遺跡、アイヌ墓なども発見され、朱太川河口付近には多くの人々が暮らした形跡が残っている。

<中世>

中世初頭（15世紀頃）には、寿都地方に既に和人が定着していたとみられる。1456（康正2）年頃、寿都を含む海岸沿いに日本海側の余市から太平洋側の鶴川まで往来、進出していたとされる。

<近世>

1600年代当初より寿都には和人が集落を形成し、アイヌの人々が求める日用品との交易の場である「商場」であった。1604（慶長9）年の記録に松前藩の商場として「スツツ」、「ヲタスツ」、「イソヤ」の地名が残っている。

1669（寛文9）年シャクシャインの乱の記録で寿都町の地名が記されたことをもって、寿都町の開基としている。

江戸時代、松前藩政下の蝦夷地には特有の流通制度である「場所請負制」があり、寿都もその商場として和人が集まってきたとされている。やがて交易権そのものを「場所請負人」（運上屋）という名で商人に代行させ、商人は交易だけでなく、漁場の経営、行政機関としての機能を持ち町の発展を担った。カクジュウ佐藤家^{※1}は明治維新で廃止される前の最後の運上屋である。鯨場としての繁栄が分かるものとして、先述のカクジュウ佐藤家、海岸線沿いに多く残る袋澗がある。

江戸時代中期、寿都は日本海の航路の拠点として重要で、身欠き鯨や鯨粕は本州へ運ばれ、本州からは米や日用品等が運び込まれていた。鯨で繁栄し物流が盛んな寿都を新天地として訪れた

か、寿都町には東北、北陸、信越地方など日本海側の地域から来た先祖を持つ人が多くいる。

1855（安政2）年北方警備のために、現寿都町総合文化センターウィズコム所在地に津軽藩の出張陣屋が置かれ、武家屋敷13棟が建てられ100人もの藩士が駐屯し、その13年後の1868（明治2）年には引きあげたとされている。

江戸時代末期に寿都方面を訪れた松浦武四郎の記録では、漁業従事者や商人が多数住んでおり、賑わっていたと記されている。

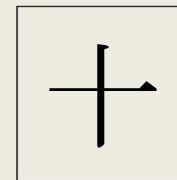
※1 カクジュウ佐藤家

佐藤家は1852（嘉永5）年以降、当時道内有数の鯨場であった歌棄、磯谷場所を管理する「場所請負人」を松前藩から任された名家である。現在残る建物は、当時郵便局の役割を果たしていた。また、初代佐藤定右衛門は私財で歌棄から黒松内までの16kmと、磯谷から岩内（雷電）までの4kmの計20kmの道を切り開き、1856（安政3）年に完成した。積丹半島開発及び漁法改良に尽力した開発功労者としても著名である。



カクジュウ佐藤家

建物の完成年代は、「平成28年度北海道指定有形文化財漁場建築佐藤家保存修理工事記録報告書」（2016）における調査によって発見された古文書から1890（明治23）年頃の建築物と推定され、鯨漁場建築に一般的にみられる漁夫宿泊部を殆ど含んでいない点に特色がある。「漁場建築佐藤家」として北海道指定有形文化財、「旧歌棄佐藤家漁場」として国指定史跡に指定されている。



屋号「カクジュウ」

また、「カクジュウ」とは、佐藤家（一門も含む）、佐藤家の製品・所有物を表すのに用いた「屋号（印、商標）」の一種である。町民の間では、「屋号」＋「名字」、または「屋号」を用いて、ある特定の家を指すことが多いため、便宜上、本構想では、歌棄・磯谷の場所請負人一族、及びその建物を指す名称として「カクジュウ佐藤家」を用いる。

<近代>

寿都（スツツ、スツ）の名は、アイヌ語の「シュプキ ペツ（茅の多い川）」から「スツツヘツ」と訛り、これが現在の地名になった。語源となった「シュプキペツ」は現在の朱太川を指していたが、周辺一帯を商場所として設定していた。1868（明治2）年に、蝦夷地から北海道へと名称を変更したと併せて、松前藩の設定した商場所を基に北海道を11国86郡に分けて設定した。その際の命名は、松浦武四郎が提案したものが基準となった。アイヌ語の音に漢字をあて、スツツ場所は寿都郡、ヲタスツ場所は歌棄郡、イソヤ場所は磯谷郡となった。

表 寿都町の地名とアイヌ語

現在の地名	アイヌ語	意味
政泊	マタ トマリ	冬の港
寿都	シュプキ ペツ	茅の多い川
樽岸	タラエキシナイ	長い浜、長磯
	タロオ ケシ	海岸が通れないため、江戸時代末期に高台に道をつくった。タロオは海岸の高いところ、ケシはその下手をさし、それに漢字があてられたとされる。
湯別	ユウヘツ	湯の川
歌棄	オタ スツ	砂浜に流れる川
磯谷	エソヤ/イショヤ	岩礁の多いところ

明治に入ると鯨で経済的なピークを迎え、港町として大きく発展していく。小学校が多くでき、寿都小学校（当時は中歌学校）から始まり、歌棄、磯谷、溪川（樽岸）、美谷、横澗、湯別、政治と1883（明治16）年から16年の間に8校が開校した。

ハリストス正教会の1882（明治15）年6月の公会（全国教役者・信徒会議）議事録に、全国の聖堂・会堂・講義所の位置が書かれており、北海道では、函館に聖堂、七重・有川・福山・寿都・小樽・札幌に会堂が示されている。また、寿都の主徒11人と伝えており、この頃には、寿都で一定の布教に成功していた。

明治初期に鯨で富む信徒の力で次々と寺院を建立し、各地域の神社の夏祭りは盛大に行われた。現在も町内には多くの神社仏閣が残っている

1900（明治33）年一級町村制施行により旧寿都町（矢追～六条）が誕生した。

1902（明治35）年には私立寿都実践女学校（現寿都高校）が創立された。

1920（大正9）年寿都～黒松内間に待望の寿都鉄道が開通した。



伊都岐島神社（横澗）

<現代>

大正時代に入ると鯨の漁獲量は次第に減っていき、1945（昭和20）年、1946（昭和21）年の群来を最後に鯨の群れは寿都から姿を消した。

寿都地方は風が強く、幾度となく大火に見舞われており、明治期から大正期にかけて焼失を避けるため土蔵を付設する商店が増え、土蔵は現在も町内に多く残っている。

1933（昭和8）年 政治村と寿都町が合併する。

1945（昭和20）年7月に空襲を受ける。

1955（昭和30）年 寿都町、樽岸村、歌棄村、磯谷村が合併し現在の寿都町が誕生した。旧町村毎の文化が形成されてきており、合併後から現在もその名残がある。

鯨が姿を消した後の水産業は、鮭の稚魚の放流、ホタテやカキの養殖などに取り組み、鯨加工の技術を活かした魚の加工や小女子の佃煮などに取り組んでいる。

1960（昭和35）年 磯谷町にある牧場を購入し、町立磯谷牧場（磯谷高原）とし、同年度から肉牛の放牧開始。以降1996（平成8）年まで放牧が続く。

1965（昭和40）年 新町発足10周年を記念し、町章を一般募集、決定する。歌棄中学校 宮川虎雄氏（学校長）作。

1968（昭和43）年 六条町に乳牛育成原野（六条牧場）を作る。

1972（昭和47）年 横澗～美谷間の海岸沿い道路（現在国道229号線の一部）が国道に移管。横澗山ノ上（旧国道）が町道の移管となる。



加藤商店土蔵（大磯町）

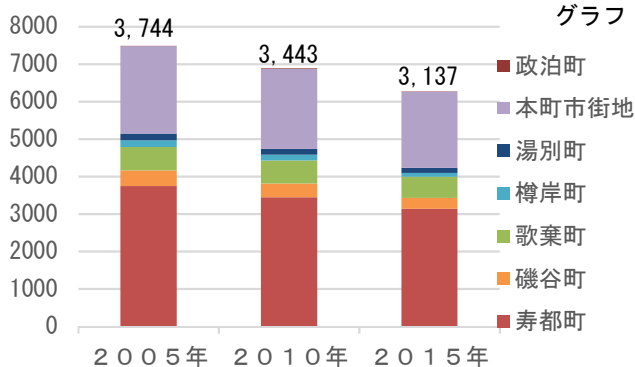
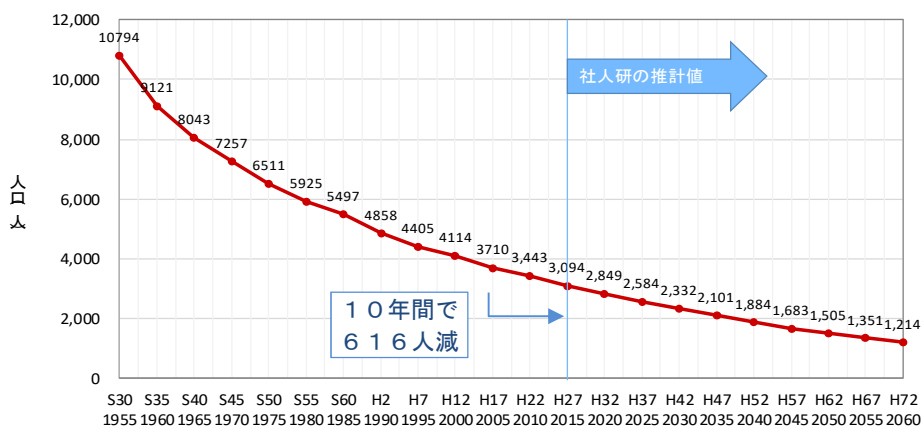
- 1973（昭和48）年 役場庁舎、消防庁舎、ファミリー体育館落成。
- 1975（昭和50）年 第1回商工まつり（第2回より寿都湾弁慶まつりに名称変更）開催。（2004（平成16）年に終了。）
- 1979（昭和54）年 寿都中学校開校。道立寿都病院新庁舎落成。
- 1991（平成3）年 町内の小学校統廃合により、樽岸小学校、湯別小学校、歌棄小学校、美谷小学校、横澗小学校、磯谷小学校が廃校となり、新たに潮路小学校が開校する。
- 1993（平成5）年 寿都町町民プール落成。
- 1995（平成7）年 寿都温泉ゆべつのゆ開業、総合文化センターウィズコムが建設される。
- 2002（平成14）年 寿都小学校新校舎落成。
- 2008（平成20）年 道の駅「みなとま〜れ寿都」開業。
- 2015（平成27）年 寿都町総合体育館落成。

3 寿都町の社会的環境

<人口>

旧寿都町、樽岸村、歌棄村、磯谷村が合併した1955（昭和30）年時の寿都町の人口は、10,794人であったが、合併時の人口をピークに人口は減少し、現在の人口は3,033人（2017（平成29）年4月末現在）となっている。1980（昭和55）年以降、5年で約300～600人程度の減少数で推移している。2005（平成17）年に比べて2015（平成27）年の人口は、616人減少し3,094人となり、人口減少が進行している。

今後人口減少傾向は続く見通しであり、2040年には1,884人、2060年には1,214人と、45年間で約4割まで減少すると推計されている。



	2005年	2010年	2015年
寿都町	3,744	3,443	3,137
磯谷町	422	368	289
歌棄町	622	621	566
樽岸町	178	146	107
湯別町	178	156	137
本町市街地	2,330	2,141	2,030
政治町	14	11	8

グラフ・表 地域毎の総人口の推移

出典：国勢調査、社人研

<交通>

寿都町の広域幹線道路は、寿都湾沿いに走る国道229号を基幹に、道道9号寿都黒松内線、道道272号寿都停車場線からなる。

公共交通としては、1920（大正9）年に開通した寿都鉄道（寿都～黒松内間）があったが、1968（昭和43）年に寿都鉄道株式会社の鉄道部門が閉鎖され、1972（昭和47）年に営業廃止となった。現在は、路線バスが主体となっている。

路線バスルートは、2008（平成20）年に寿都線（寿都～小樽間）が廃止され、現在は、岩内町方面、長万部町・黒松内町方面、島牧村方面を往復する4路線が運行している。戦後しばらくまでは寿都・島牧間を木炭バスが走っていた。



図 現在の寿都町周辺の交通路線図

<産業>

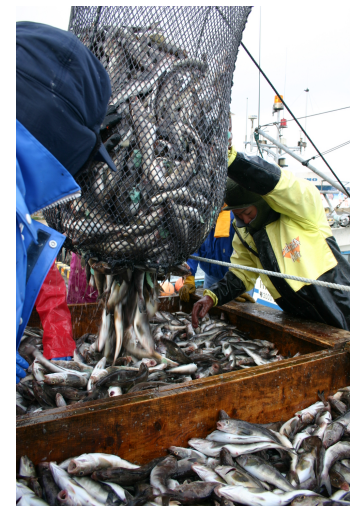
寿都町の基幹産業は、古い歴史を持つ漁業で、漁獲物を活用した水産加工業とともに町の経済を支えている。漁業就業者等の減少、高齢化、水産資源減少、漁獲量・単価の低迷が課題となっている。水産加工は比較的安定している。

農業は、傾斜地が多いことから大規模農用地の確保が困難なため、小規模経営農家が大部分を占めている。小規模のため生産性が低く、高齢化の著しい進行、後継者不足、農家戸数の著しい減少が課題となっている。

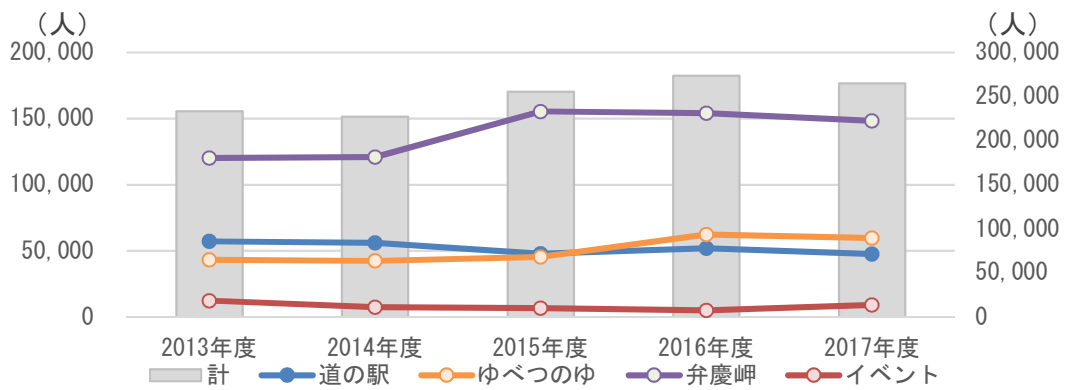
商業の大半は市街地地区に集中しているが、近隣市町村への大型店舗進出により、町内消費の減少が著しい。

観光は、寿都温泉ゆべつのゆ、弁慶岬、カクジュウ佐藤家、磯谷高原、風車、浜中海岸、道の駅「みなとま～れ寿都」を中心に振興しているが、大半が夏期の海水浴、釣りをメインとした道内日帰り客が多い。最近は、漁業体験などの交流型観光の萌芽が見られる。観光客入込数は、2014（平成25）年度から2016（平成27）年度にかけて増加傾向にあり、2017（平成28）年度は減少している。

工業については、製造業のうち、約8割が水産加工業者で、寿都湾で水揚げされた魚介類の加工事業所が多く存在する。



ホッケ漁



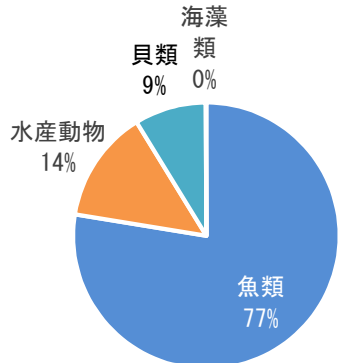
グラフ 観光入り込み数

出典：寿都町統計資料

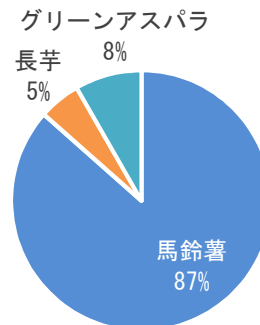
主な水産物は魚類であり、特にホッケの水揚げが36%を占める。水産動物の中では、イカ、タコ、ナマコが多く、貝類の中では、ホタテが最も多い。

農産物については、安定して収穫があるのは馬鈴薯となっており、2016（平成28）年には237.3tの収穫がある。漁業とともに寿都町を支える産業として発展していくことが期待されている。

商業における総従事者数は、2014（平成26）年は2007（平成19）年に比べ862人減少している。2014（平成26）年における事業所数は45であり、そのうち小売業が36件、卸売業が9件となっている。

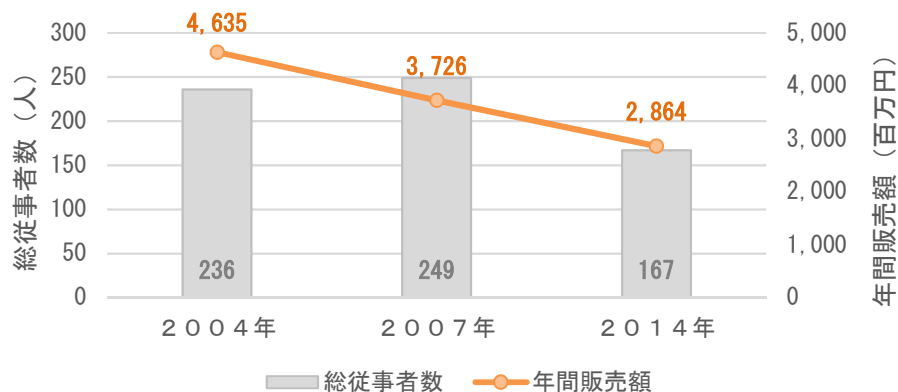


※2016（平成28）年度
グラフ 魚種別漁獲割合



※2016（平成28）年度
グラフ 品目別農産物収穫割合

出典：寿都町統計資料



グラフ 商業の総従事者数と年間販売額の推移

出典：寿都町統計資料

＜土地利用＞

長い海岸線に沿って主に漁業を営む集落が複数形成されている。

町の中心は本町市街地で、官公庁、文教、保健・医療等の公共施設が集積し、商業地、各事業所、漁港区、住宅地が広がる中心市街地を形成している。湯別地区には温泉が湧き、隣接する歌棄地区には福祉施設が集積している。

江戸時代から漁師や商人の定住が海沿いにあったことから、新たな施設を海沿いに作る事が困難だったため、1878(明治11)年頃から中歌学校、寿都区裁判所、寿都郡役所などの官公庁施設や寺社などが山側に建設された。現在の磯谷町横澗、歌棄町美谷など一部の地域も同様に、海沿いの土地にカクジウ佐藤家など有力者達の漁場がある。海沿いに家を構えることが難しく、漁師や出稼ぎ、商人などは山の上に家を構えた。横澗は現在も集落を維持している。

＜地区の特徴＞

寿都町内の地区は、現町名区分で見ると、磯谷町、歌棄町、湯別町、樽岸町、政治町、および本町市街地内の六条町、岩崎町、大磯町、矢追町、新栄町、渡島町、開進町に区分できる。以下に、地区ごとの特徴を整理する。

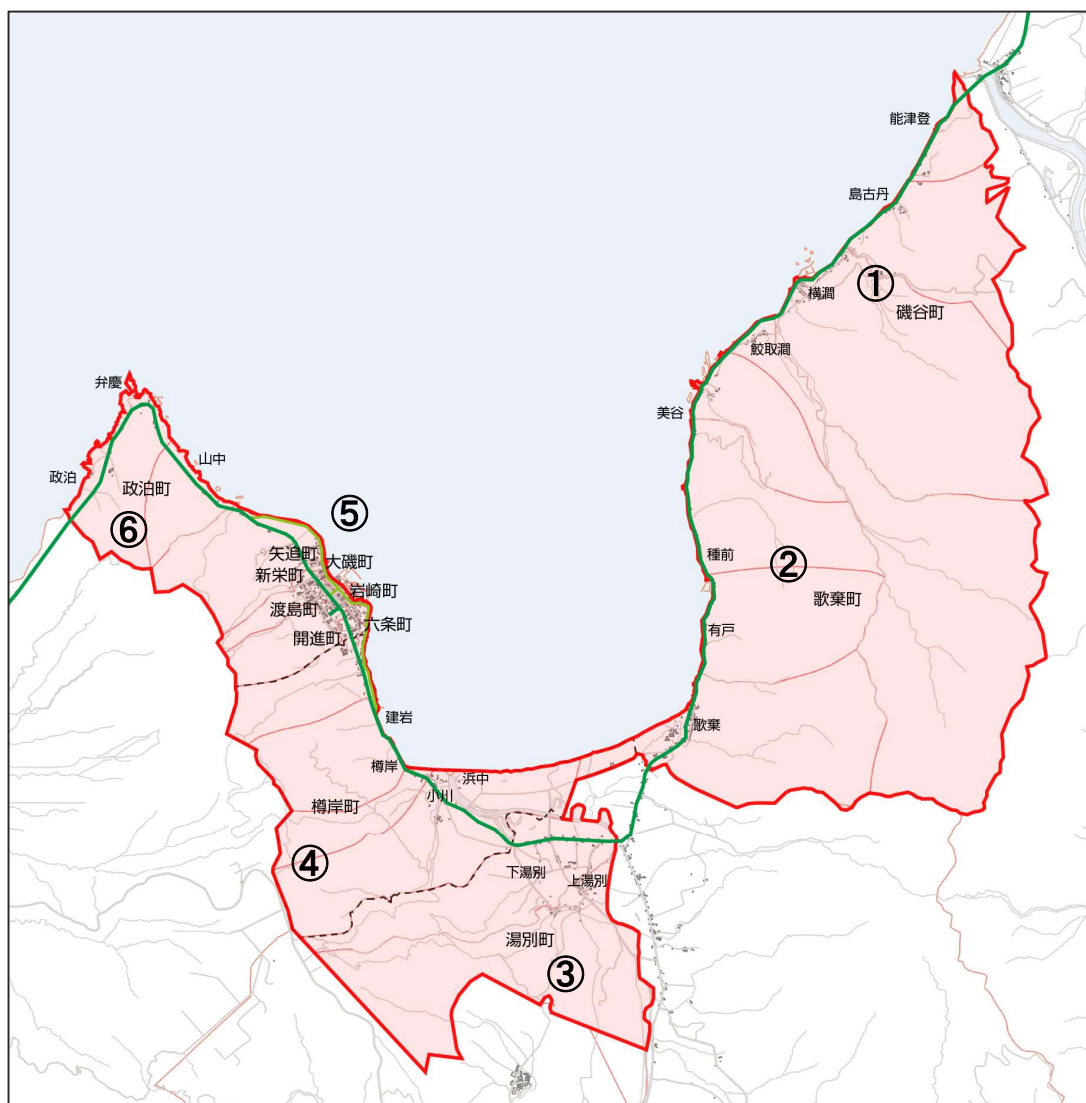


図 寿都町内の地区区分

①磯谷町

尻別川以南、寿都町の北端に位置しており、能津登・島古丹・横澗・鮫取澗と分けられる。人口は2005（平成17）年には422人だったが、2015（平成27）年には289人と133人減少しており、人口減少率が高い地区となっている。

寛文年間、商場所（知行主所領）ができて和人も住みつき、アイヌとの交易が盛んとなった地域である。渡島国から道北・道央への道のりの途上地域であったが、北の岩内郡へは雷電峠が難所となって陸路が途絶えて舟に頼っており、安政年間に磯谷・歌棄場所請負人が磯谷—イワナイ山道を開削したことで、通年の陸路での移動が可能となった。

1902（明治35）年北海道二級町村制施行により、島古丹村、横澗村、能津登村、北尻別村が合併し磯谷村が発足した。

1955（昭和30）年に1町3村が合併し寿都町になったすぐ後に、寿都町と磯谷郡蘭越町との境界の一部が変更され、旧村域の大字北尻別が蘭越町域となった。合併の際には、合併反対の大運動が起き、むしろ旗のデモ行進が繰り広げられた。

横澗に歌棄の別家であるカクジュウ佐藤家があった。大きな親方の家や番屋があったが、現在は取り壊されている。

海食崖を背にして沿道に集落が連なり、社寺（最尊寺、登順寺、願翁寺）、円空像のある海神社が立地している。幌別川付近には発電所や溪谷橋があった。また、高原にはかつて町営や私営（志村家など）の牧場があった。

横澗に弁天島があったが、昭和59年から平成3年に行われた横澗漁港改修工事に伴い、弁天島は取り壊された。弁天島に鎮座していた伊都岐島神社は昭和62年に山の上へ移転した。

②歌棄町

磯谷町の南に隣接しており、寿都湾の対岸の本町市街地や背景の狩場山系の山並みを望むことができる。人口は、2015（平成27）年には566人と本町市街地の次に人口が集積しており、2005（平成17）年と比較すると56人減少している。

寛文年間、商場所（知行主所領）ができて和人も住みつき、アイヌとの交易が盛んとなった。

1906（明治39）年北海道二級町村制施行により歌棄郡潮路村、有戸村、種前村、美谷村が合併し、歌棄村が発足した。

大漁師のいる漁村であり、かつての鯨の大親方の系譜をひく家が何軒か存在する。

現在、浜中地区には風力発電の風車が立地しており、小規模ながらハウス栽培にも取り組んでいる。また、沖縄料理屋や牡蠣小屋など、新たな取組が生まれる地でありながら、カクジュウ佐藤家、橋本家、土蔵や社寺（龍昌寺、西光寺、教立寺、歌棄敵島神社、美谷稻荷神社）など、歴史的建造物も比較的残っている。

③樽岸町

南東は湯別町、北西は本庁市街地に隣接する地区であり、朱太川が地区の北東に流れている。2005（平成17）年には178人だった人口が、2015（平成27）年には107人と71人減少しており、人口減少率が町の中で最も高い地域となっている。

1923（大正12）年4月に、北海道二級町村制施行により寿都郡樽岸村、湯別村が合併し、樽岸村が発足した。

昭和40年代まで寿都鉄道の樽岸駅が存在した。鉄道は、はじめは山の上を通るはずだったが、地元の要望により、敷設工事直前に下を通すことになり、設計をやり直した。樽岸稲荷神社は、鉄道敷設にともなって、山の上に移動した。鉄道駅舎が唯一残っていたが、2016（平成28）年に取り壊され、暗渠やガーター橋のみ現存している。

漁村ではあるが、現在は大規模経営の漁家は存在しない。鯨が獲れなくなり、樺太に移住した人もいたと言われている。樽岸町と浜中の境界に、風神^{*1}が祀られている。

※1 風の神様（風神、風評）

（呼び方：かざかみ、かざがみ、かぜかみ、ふうじん、かざなぎ、ふうびょう など）

歌棄町の厳島神社に納められている「風評（かざなぎ）さん」は、風をいさめる寿都らしい神様のこと。手に持つ鎌で強風を切り、穏やかにすると言われており、だし風で船が出せない漁師達から、長く信仰された。

昔、寿都の家や浜では、強風をおさめるおまじないとして、棒にくくりつけた鎌を立てていたようである。

④湯別町

東は歌棄町、西は島牧村、南は黒松内町に隣接する地区となっている。2005（平成17）年には178人だった人口が、2015（平成27）年には127人と41人減少している。

1800年代頃より湯別温泉を掘り当て、宿泊宿などと共に栄える。現在は寿都温泉ゆべつのゆが立地しており、美肌効果が高いとされる硫黄泉と、血行を良くする効果が高いとされる塩化物泉の異なる2種類の温泉があり、地元の人や観光客が訪れる場所となっている。

1923（大正12）年4月に、北海道二級町村制施行により寿都郡樽岸村、湯別村が合併し、樽岸村が発足した。

寿都唯一の農村地帯だが、平野部が少ないため大規模な他市町村の農家には勝てない状況で、現役で大きく経営するのは町内で一軒のみとなっている。離農があいつぎ、人口減少が進んでいるが、黒松内町など近郊市町村の人が営農しており、土地利用としては農耕が多い状況である。土が良いという説もあり寿都のジャガイモは美味しいと、函館や室蘭でも評判だった時代があったと言われている。当時の畑の作物は、1899（明治32）年の調査によると、麦、イナキミ、馬鈴薯、菜種、豆類に加え、水稻などがあり、水稻については1910（明治43）年後志支庁調査によると作付面積が約300町歩（300ヘクタール）となっている。

昭和40年代までは寿都鉄道の湯別駅が存在した。

⑤本町市街地

本町市街地全体の人口は、2005（平成17）年には2330人だったが、2015（平成27）年になると2030人と300人減少している。

●六条町

海岸沿いの南端に位置している。建網の漁場持ちの居住する地区で、寿都町の漁業基地であった。明治～大正期には、海岸沿いに大きな番屋や鯨小屋が並んでいたが、昭和に入り漁業人口が減少して、現在は蔵や倉庫が数棟残るのみとなっている。

●岩崎町

六条町と海岸沿いに隣接する最も早くから開けた地区である。嘉永年間には漁村としての形態を見せており、建網の漁場持ちの居住する地区で、寿都町の漁業基地であった。明治期には、海岸沿いに大きな番屋や鯨小屋が並んでいた。また、三輪大謀龍神があった。

●開進町

岩崎町、大磯町との町界から山手に登ったところに位置しており、現在、本町市街地の中で、最も人口の減少が少ない。1856（安政3）年に津軽藩陣屋が設置されたが、現在、遺構は殆ど残っておらず、津軽藩出張陣屋跡説明板が存在する。

かつては海岸側を中心に漁業集落だったが、戦後、公営住宅が建設され住宅地区となった。国道がバイパス化されて以来、総合文化センターの建設など寿都町市街地の玄関として開発が進んでいる。

●大磯町

海岸沿いの中心部に位置している。岩崎町とともに早くから開け、1869（明治2）年まで運上屋があった。明治期には、廻船問屋、呉服屋、寿都汽船株式会社、北海道拓殖銀行などが商業地区を形成し、寿都町の中心として発展した。大正期、寿都漁港が築港されて以来、漁業組合や水産加工場、冷蔵庫など漁業関係の施設が増えた。現在も明治、大正の土蔵造、石造の建物が残っており、同町最盛期の様子をうかがえる。

●渡島町

大磯町と開進町に隣接している。明治期に町役場や警察署、寿都支庁などの各種官庁機関や公共施設が立地、行政の中心地として発展した。法華寺、善龍寺により寺町通りの一部が形成され、郷社壽都神社もこの一角にある。

1920（大正9）年、寿都鉄道開通以降駅舎及び機関庫が置かれた地区で、商店や運送会社の並ぶ駅前通りが形成された。現在、駅舎跡地には役場、消防署が建っている。

●新栄町

大磯町と矢追町に隣接している。かつては飲食店や料亭など歓楽街を形成し、大正期頃まで遊郭もあった。

地区の西寄りには、法界寺、龍洞院、願乗寺が横一列に並び、渡島町と一体の寺町通りを形成しており、山側に菩提院がある。

地区のはずれにあった寿都鉱山は、明治期には銀鉱山であったが、大正期に亜鉛と鉛の鉱山に切り替わった。鉱山にはかつて製錬所があった。

1889（明治22）年、1898（明治31）年、1925（大正14）年、1949（昭和24）年に大火が発生した記録がある。

●矢追町

かつて建網漁が盛んに行われ、親方が多く存在した地域である。現在は刺網漁が主体の漁師町となっており、水産加工場や倉庫が多い。寿都小学校、寿都高等学校、コンクリート工場が建てられている。

⑥政泊町

本町市街地に隣接する地区。かつては独立した自治体であり、家屋が密集していたが、2015（平成27）年時点での人口は8人である。

1855（安政2）年には、露船が訪れ、空砲三発を轟かして弁慶岬沖に仮泊することもあった。1923（大正12）年に北海道二級町村制施行により寿都郡政泊村が村制施行し、政泊村が発足した。その後、1933（昭和8）年10月1日に寿都町と合併した。

島牧との間の道路は七曲がりと呼ばれる難所であり、ここを正教会のロシア人宣教師も歩いた。戦後しばらくまでは寿都-島牧間を木炭バスが走っていた。

弁慶岬があり、現在は観光や釣りのメッカとなっている。